



無人島へ持参する木下恵介作品

～木下恵介研究連続講座全五回へのお誘い～

齊藤 卓 木下恵介記念館館長

もしひょんなことから、明日から無人島へ行くので木下恵介映画作品から一本だけDVDを持って行っても良い、となると何を选ぶのか随分迷うだろうと思う。その無人島にDVDの再生装置や電源があるのかはとりあえず分からないし、まずそんな事は起こらないと思うから、気軽に考えてみるのだが、でももし木下恵介四十九映画作品から一作品を選ぶとなると、これはかなり困ったことになることだけはまちがいない。「けいすけクラブ」のメンバーと、「そうだよ。一作品って難しいよね。選べるかな？」なんて言いながら「僕とすれば『永遠の人』かなと思うんですよ……でも、うーん、悩むよねー」とか言っているあいだは良いのだが、これからさらに三步も十歩も入り込んで真剣に作品を選ぶとなると、間違いなくピロリ菌がいなくても、やがて鳩尾の底のあたりがしくしく痛んでくることは経験から分っている。

こんな事を勝手に考えてしまうのは、これは僕の妄想かもしれないのですが、いや完全に妄想に違いないが、楽しい妄想でもある。

以前、演出家の横堀幸司さんとお話しをさせていただいていた時、横堀さんが間髪をいれず実に絶妙なタイミングで、「齊藤さんは木下さんの作品でベストはどれ！」と尋ねてこられた。横堀さんの会話というか質問はこうしてある瞬間に、三本の矢どころか、一本の強烈な矢が打ち込まれてくることがある。つまり油断ができないのだ。きっと横堀さんも、助監督時代にこんな風に木下恵介監督に鍛えられたのではないかと感じてしまうほどだ。僕はああ困ったなどうしようか、と思いながらも、横堀さんの凄い迫りに圧されて「えいやー」とあまり考えることもできないで答えを返してしまっていた。「それは『女』です」と言ってしまった。その時、どうして『女』と言ってしまったのか、確かな理由はみつからないのだが、

しまったのか、確かな理由はみつからないのだが、「ベストっていうからには絶対に『女』ですよ、まちがいないです」という気持ちで言葉がでていた。僕の答えをお聞きになった横堀さんは「へビーだね」と言われたように思う。そのあとの会話がどのように進んだのかは、まったく記憶していないので、その時の「木下恵介作品をめぐるベスト談義」は保留になったままなのだが、いまもし同じように横堀さんが質問をされたら僕は『女』と答えるかどうか分からない。勿論『女』と答えることだってあるし、絶対に『女』だと言うこともあるのだが、木下恵介全四十九作品の魅力はそれを許してくれないのだ。木下恵介作品からベストワンを選ぶとか、ベストスリーを考えてみるというのは楽しいことにちがいないのだが、迷って迷って、それを楽しんでまた迷って、最後に「選べないですよ。無理ですよ」って言いたくなるような楽しさなのではないかと思う。

二〇一三年度、木下恵介記念館では「木下恵介研究連続講座全五回」を開催する。(かなり手前味噌ですがこんな面白い講座が組めるのは木下恵介記念館だけです。)先に「ベスト談義」をご紹介した横堀幸司さんも来ていただける。木下組の重鎮(脇田茂さん)から、現役の映画監督(阿部勉さん)、映画評論家(劉文兵さん)と講師陣は多彩である。ひとつこの講師陣の皆さんに「無人島へ行く時にあなたが持って行く木下恵介作品一本は何ですか？」をお聞きしてみようかと思う。質問の意図は、みなさん大いに悩んでください、という僕のひそかな楽しみである。そして講座に参加していただける方々にも、それはお聞きしなければならない。人の意見だけを聞いて、そういうものか、なんて訳知り顔で外堀にいるようなことは木下恵介がゆるさないはずだ。